

稲作なくして国家存立なし

グローバリゼーションの潮流が強まる中で、農業の価値をどのように考えるべきでしょうか。荒谷 グローバリゼーションは現在、最終段階にきていると考えています。世界保健機関（WHO）は5月の総会でパンデミック条約と国際保健規則（HIR）の採択を目指していますが、加盟国の政府の判断がWHOの勧告に拘束され、保健政策に関する国家主権の侵害をもたらす可能性があると懸念されています。まさにこうした動きは、惨事に付け込んで一気に政策転換を図るといってシヨック・ドクトリン（惨事便乗型資本主義）の典型だと思えます。グローバリストたちは、今回のコロナ禍ではワクチ

ンの接種義務化などが中途半端な形で終わったという認識を持っているでしょう。そこで彼らは、パンデミック条約と国際保険規則の改定により、次にパンデミックが発生した際に、ワクチンの接種義務化のほか、ワクチンパスポート、ロックダウン、情報の検閲、言論統制などをWHOの権限でできるようにしようという論んでいるようです。また、今年の世界経済フォーラムの年次総会（ダボス会議）では、国際金融システムに対するサイバー攻撃のリスクが高まる中で、サイバー攻撃のリスクが高いと認定した段階で、世界中の政府と中央銀行に対して全ての金融資産あるいは経済活動に対して強制力を働かせて、銀行業務を停止させるなどの権限を与える

農業問題、食料問題こそ、安全保障問題なのです。かつて日本にはそれがわかっていた政治家が多くいました。中川一郎（農水相）、渡辺美智雄（農水相）、玉沢徳一郎（農水相、防衛庁長官）、江藤隆美、浜田幸一といった人たちは、いずれも農林族であると同時に防衛族でした。タカ派の青嵐会の大半も農林族でした。ところが今や、そうした系統は、自民党では農林相と防衛相を歴任した石破茂氏くらいのもので、現在は、多くの保守派が、軍事的な安全保障を強調する一方、食料安全保障を軽視しているように見えます。

地方の声を代弁する政治家がいない

なぜ農林族議員が少なくなってしまったのでしょうか。

篠原 これは選挙制度の問題と密接にかかわっています。私はこのまま人口比で定数は正を進めていくと、人口の集中する大都市の人たちの思いのままに日本が造り変えられてしまうのではないかと危惧してきました。私が政界に入った頃は、参議院の2人区は、長野県も含めて10区ありました。ところが、人口比で調整

が行われたことから2人区が瞬く間に減り、今や茨城、静岡、京都、広島の4県のみになってしまいました。その一方で、北海道、千葉、埼玉、神奈川、愛知、東京、大阪、福岡など大都市部では定数が増えています。今回の衆議院の10増10減は、東京5増、神奈川2増、埼玉、千葉、愛知が1増と首都圏ばかりが増えています。つまり国会における都市部の支配が進展し、地方の声が反映されにくくなっているのです。

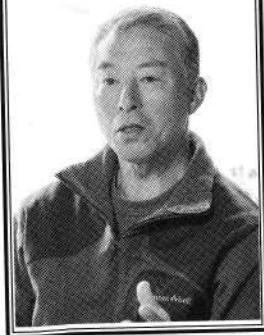
私はアメリカの上院を見習う必要があると思います。アメリカでは、下院は435議席で、2年ごとに人口比により選挙区が改正されますが、上院は50州が小さくとも大きくとも、平等に各州2人ずつで、2年ごとに3分の1ずつ改選されます。また、多くの先進国は都市部の支配にならないようにと地方への配慮をしています。我が国にはそうした仕組みが全くないのです。地方に非情な国だということです。選挙制度の在り方も、地方を守るといって視点から考える必要があると思います。

（聞き手・構成 坪内隆彦）

稲作なくして国家存立なし

熊野飛鳥むすびの里代表

荒谷 卓



べきだという提案が出されました。これは、国民の財産を管理下に置くものであり、国家主権剥奪の金融経済バージョンと言ってもいいと思います。こうした事態になれば、生命活動全てが成り立たなくなります。

明治以降の日本は、グローバリゼーションの仕組みを取り入れつつも、我が国の伝統と文化を堅持する方針を明確にし、大東亜戦争まではグローバリゼーションに立ち向かっていました。しかし、戦後は完全にグローバリストの軍門に下ってしまいました。ところが、ここに来て世界中の人々がグローバリゼーションは人類の歴史上、最も大きな過ちだったことに気がついたのです。

ですから、グローバリゼーションの最終形態が確立する前に、それを阻止しなければなりません。いま、そうした動きが世界各地で出現してきていると思います。

例えば、アメリカでは2016年にトランプ氏がグローバリゼーション反対を主張して大統領選挙に出馬し、実際に大統領になりました。一旦はその地位を追われましたが、今年の大統領選挙では、客観的に見て

間違いなくトランプが勝つでしょう。方がトランプ氏が選挙で負けるようなことになると、トランプ氏を支持する人たちは内戦をも辞さないという状況になっています。

また、ロシアのプーチン大統領はウクライナ戦争以前から明確に反グローバリズムの秩序を打ち出していました。プーチン大統領は「特定の国や特定のエリアトが世界を管理するという考え方は根本的に間違っている」と主張しています。そして、そうした間違った世界を解体し、改めて伝統文化を基軸にした、それぞれの独立国家からなる世界を構築しようと提案しています。このプーチン大統領の主張は、実は大東亜戦争当時、日本が主張していた考えとほぼ同じだと思います。しかし、残念ながら、日本はその志半ばで終戦を決定し、その主張を放棄せざるを得なかったわけですから、今改めてプーチン大統領が世界レベルでそれを打ち出したのです。

ウクライナ戦争をめぐる、アメリカがロシアに対する経済制裁を強めたことによって、逆に世界の多くの国がアメリカから離れて、プーチン大統領の提案に賛

同する動きを強めています。BRICSも、中東の産油国もアメリカの軛から逃れ、プーチン大統領と組んで、SWIFTやペトロ Dollar システム等のドル基軸体制から離脱しようとしています。ドル基軸体制が崩れるとともに、プーチン大統領の「核戦争も辞さない」という断固たる姿勢に遭遇した結果、アメリカはもう1つのパワーの源泉だった軍事力を持ってしても、自分の意思を実現できないという状況が露呈しました。

私は、今後グローバリゼーションの流れは弱まり、同時にアメリカのコミットメントも後退し、それぞれの国家の伝統と文化に基づく国際社会に移行していくだろうと見ています。ところが、残念ながら日本は崩れゆくグローバリゼーションの中から抜け出せない状況が続いています。

神話が示す日本の伝統文化

——日本が伝統文化を基軸とした独立国となる上で、農業はどのような役割を果たすのでしょうか。

荒谷 グローバリゼーション以後の国際社会について、プーチン大統領は「それぞれの国がそれぞれの国

の伝統文化に基づいて自立する社会」だと述べています。また、イーロン・マスク氏は、国家というのは、その伝統文化というアイデンティティがあるからこそ国家と呼べるのだと発言しています。

私は、これからの社会において、国が国として成り立つには、それぞれの国が伝統文化に基づいたアイデンティティを明確に保有しているということが大前提になると思います。グローバリゼーションにおいては、それぞれのアイデンティティを破壊しなければ、新しいルールに移行できないので、意図的に国家の歴史を断絶しアイデンティティを抹殺してきたわけです。

これから我々は、改めて日本という国のアイデンティティの所在を明確に打ち立てなければ、国家として存続できないということです。そのアイデンティティは、これから発明するものではなくて、歴史、伝統文化に基づいたものでなくてはなりません。

では、日本の歴史、伝統文化とは何か。神話には、天照大神は、豊葦原中国が、高天原と同じように豊かになることを願い、自らの子孫に高天原の稲穂を授ける「斎庭の稲穂」の神勅を下したとあります。



医療の問題などを解決しなければ、自立は実現できません。農士とは、稲作をする農業主体であると同時に、多少の雨を凌げる程度の住居を自分で建て、養蚕によって衣服を作り、人間が生きていくために最小限必

古事記に出て来る「食国」というわが国の名称にしても、稲作をし、人々の生活と安定を保証するという日本の建国以来の国柄を示していると思います。

御歴代の天皇の中でも、第26代の継体天皇は、「故帝 王躬ら耕りて、農業を勧め、后妃親ら蠶して、桑序を勉めたまふ」との詔勅を出されています。この詔勅は、男性は農業に従事し、女性も養蚕に従事し、農作物と衣服を自ら生産できる体制を作ることによって、国家の自立と人々の自立が実現できるということを示しているのだと思います。

我々がグローバリゼーションを良きものと考えてしまった理由は、海外に依存しても生きていけると思い込んでしまったからだと思います。生命活動に根本的に欠かせない「衣食住」でさえも、自分で生産しなくても生きていけると誤認してしまっただけです。お金さえ持っていれば、自分で作らなくてもいつでも手に入られると思っ込んでいたのです。

自らが衣食住の生産主体にならなければ生きていけないというのを、グローバリゼーションの失敗の中から学び取らなければなりません。つまり、日本とい

う国家としてのアイデンティティを保全するという意味においても、国民一人ひとりが、自立、自活して主体的に生きていく基盤を作るという意味においても、おコメを自ら生産できる体制を確立することは非常に意味深いことになると思います。それは、グローバリゼーション以後の世界において、日本が存続していく際、最も中核たるテーマになると思います。

「農士」の精神とは

—— 荒谷さんが強調している「農士」の精神とはどのようなものですか。

荒谷 私は、集落としての生活拠点として熊野飛鳥むすびの里を開設しましたが、日本全体を考えた時に、それぞれが独立自治を確立できる集落を日本各地に建設し、それを天皇陛下がしろしめし、まとめていくという構想を抱いています。その際、それぞれの集落を運営していくために必要な理念と技能を備えた人材を、私は農士と呼んでいます。

農士は、単なるおコメの生産者でも、農業経営者でもなく、集落という一つの共同体が自立して生きていかなければならないという共通の知見を持ち、一定の体験を経た人物だと考えています。かつて「百姓」と呼ばれたように、農業だけではなく、あらゆる仕事をすることができる人材です。

むすびの里は、田んぼもやり、畑もやり、林業もやり、大工もやり、自立に必要な様々な仕事を自ら行うことによって自律性を高めようとしています。設立から5年程度しか経ってないので、まだ完成形ではありませんが、かなり自立、自治に近づいてきています。むすびの里に当事者として参入してもらい、朝から晩まで同じ生活をしていただくことで、農士としての技能を身に付けてもらいます。日本人は昔から、技能を身につけることを「見習う」と言った通り、勉強するよりも、実地で体験することによって技能を身につけてきたのだと思います。

ご先祖様への感謝の念と自然に対する畏怖の念

—— 日本農士学校の検校(校長)を務めた菅原兵治は「農士道」で、「農士道とは東洋道徳の精髄たる「士道」を、農的生活の中に実現せんとする道」だと書き、

共同体に奉仕する仕事を通じて、自らの人格、道徳性を高めていくことの重要性を説いています。

荒谷 例えば、壊れた田んぼを修理するには、大変な手間暇がかかります。その時に、田んぼを作ってくれた人が、どれほどの苦勞をしたのが実感でき、ご先祖様への感謝の念が沸き起こります。また、水道の蛇口をひねれば当然のように水が出てきますが、何キロも先の水源池から水路を引く作業を想像すれば、大変な苦勞をして水路を整えてくれたご先祖様に対する感謝の気持ちが自然と起こります。

また、農業を実践すれば、自然に対する畏怖の念を抱くこととなります。おコメが成長するためには、お天道様が出てくれなければなりませんし、適度に雨が降ってくれなければなりません。しかし、天候は人間の力で制御できるものではありません。つまり、農業を体験する中で、ご先祖様への感謝の念と自然に対する畏怖の念を養うことができます。これこそが、「神ながらの道」の実践です。

さらに、共同作業を行う際には誰かが取りまとめ役を務めなければなりません。しかし、単に能力のあるているので畜産をやめろ」といったグローバリストの暴論に対して、猛烈な反対活動が展開されています。また、ヨーロッパの先進国政府も、グローバリゼーションの負の側面をよく理解しており、フランスなどは農業を重視し、食料を完全自給する政策をとっています。フランスだけではなく、ヨーロッパ諸国は高い食料自給率を維持しています。

また、グローバリズム以後の世界では、自由貿易至上主義が崩れ、輸入によって食料を確保することはできないので、自分たちで農業生産しなければならぬという考え方に立ち返っていくでしょう。

—— 日本文化の根幹にある調和の精神は、新たな国際秩序の創造においても重要な役割を果たすこととなるのでしょうか。

荒谷 全人類がグローバリゼーションの誤りに気づき、新しい世界を作ろうと考えた時に、特定の少数数の人間が権力を持ち、強制力によって世界を管理するという体制は否定されることとなります。同時に能力主義、合理性を絶対視する考え方も見直されると思います。

人が指導するということになれば、そこに権力構造ができてしまいます。だから、取りまとめ役は道徳・倫理観において、他よりも優れた、徳のある人でなければなりません。

例えば村長になる人には、徳の高さが求められます。同様に、一家の長になる人にも徳の高さが求められます。いずれ共同体の取りまとめ役、一家の長になるならば、徳を積まなければならないということです。農作業を中心とする共同体における作業を通じて、徳操、倫理観が自然に養われていきます。そうしたものは、学校で習って身につくものではありません。

「天皇による統治」の理念が有力な選択肢になる

—— グローバリゼーション以後の世界では、日本以外の国でも「農業が国の根幹である」という考え方が強まるのでしょうか。

荒谷 いま農業の重要性は、それぞれの国で再認識されています。反グローバリゼーションを掲げるドイツやフランスの農民たちの運動は非常に活発になっています。例えば、「牛のゲップが地球温暖化の原因になっ

ただ、残念ながらアメリカのような近代以降に誕生した国は権力構造による統治しか体験したことがないので、権力以外の新たな統治秩序についてのアイデアを出すことはできないでしょう。

こうした中で、競争の勝者が社会的地位まで占有する「権力」統治ではなく、社会的地位には相応の人格を必須とする「権威」による統治を理想としてきた日本こそが、世界に新たな秩序の在り方を発信するべきだと思います。権力を持たない天皇による「しろしめす」統治の歴史を紐解き、我々自身がそこに立ち返り、そのサンプルを国際社会に示せば、国際社会はそれを有力な一つの選択肢として考えてくれることになるはずです。

当面は、グローバリゼーションの最終段階において、かなり悲惨な状況が起きてくるとは思いますが、日本が本来の姿に立ち戻る絶好の機会が近づいているのではないのでしょうか。悲惨な状況だけを見てやる気を喪失することなく、未来に目を向けてわが国を再生する方向に進むべきだと思います。

(聞き手・構成 坪内隆彦)